

1932年 5月22日 日曜日〔義母宛の手紙〕

ファレーズにて

お母さまへ

昨日、ここへ来ました。チャールズは、釣りに行ったり、お散歩をしたりして過ごしています。ここは、とても静かな美しい所で、来て良かったと思っています。チャールズは今、勉強をしています。

母とエリザベスは、エングルウッドに帰りました。きっと、もうずっとエングルウッドにいてことでしょう。ホープウェルのような、犯罪の空気の漂うような所にはもう暮らす意味はありません。ホープウェルは、そういう所なのです。ですから、エングルウッドにいて欲しいと思います。事件の再現と捜査が、常に行われています。私は、あの子の人生を終わらせてしまった犯罪よりも、あの子との幸せな思い出だけに浸りたいのです。

警察もきっと、今週いっぱい、ホープウェルからは撤退すると思います。

彼等がそこにいる必要は、もはやなくなりますし、警官達だってトレントンにいた方が良いでしょう。チャールズは、これからも警察には密に連絡を取り続けるつもりでいます。もちろん、犯罪者を逮捕しなければならぬので、そのためにも、今までの警察の献身的な態度に対しても、全面的に協力すべきだと、チャールズは考えています。自分達の個人的なことを犠牲にしても、ということです。私は、この事件とホープウェルからは、しばらく離れていたい気持ちです。(とは言っても、不思議とこの数ヶ月の間に、あの場所にも愛着が湧いてきました。)

でも、チャールズが事件だけに没頭することは、必ずしも良いとは思いません。研究所の仕事にも、戻って欲しいと思いますし、それは、彼個人にとって、建設的かつ必要な仕事であると思います。静かに、夢中

になれる仕事ですし、チャールズは研究所の話をするのが一番嬉しいようです。彼は、しばらくホープウェルからも、エングルウッドからも離れたいと言っています。しかし、この事件と出産のために、ニューヨークの近くにいなければなりません。⁽¹⁵⁵⁾

ホープウェルでは毎日、チャールズと二人で、スキンとワーグーシュを連れてお散歩をしました。とても美しい所ですし、チャールズにも私が愛するようになったあの土地を知ってもらえて、とても嬉しいです。チャールズにとっては、思いがけないことだったと思います。シダが生い茂っていたり、メキシコの鉋で下枝を刈っては、道を歩きやすくしてくれました。

日記

5月23日 月曜日

エングルウッドにて

ここに来て、私が誰にも気付かれないうようにそっと2階へ上がって行くまでは、私の息子は遠い人のようであった。

彼の部屋に入るやいなや、まだ何も見ていないのに、総てが蘇った。あの子のおもちゃ、雄鶏やスウェーデンの馬、オルゴール、糸巻きにクレヨン、小さな青いスツール、積み木箱の車、私のスクラップブックが、全部そのままであった。

ジョンソン・ベビーパウダーの缶、とても懐かしい、良い香り。私が壁にかけた絵、白いテーブルと椅子。そして、あの子のタンスの引き出し。一つ一つの引き出しには、チャーリーの鮮明な思い出がぎっしり詰まっている。ジョーの手編みの赤い帽子、ピーター・ラビットの青いタモシャンターのベレー帽。それから、毎晩階下に遊びに来る時に、寝巻

(155) リンドバーグ夫妻は、出産予定日が近づき、医師の近くにいるために、エングルウッドに引っ越した。

きの上に着ていた小さな青い手編みのジャケットが、毛布の下でクシャクシャになっている。思わず、その中に顔を埋めた。

ベビーベッドの中には、麻布で作った犬と尻尾がとれそうな鼠色の猫のぬいぐるみ。ベビーベッドに手をかけた時のあの慣れた感触が、あの子をそこに呼び戻したようだ。チャーリーはここにいるはずなのに、なぜあの子はここにいらない？ 私は泣きじゃくりながら下へ降りて行きたけれど、満足だった。恐かったので、ベビーゲートはカチッというま

で締めなかった。

チャールズは、今晚帰ってきてくれるので良かった。

5月24日 火曜日

エングルウッドにて

二階で足音がして、目が覚めた。あの足音は、もうあの子でも、ペティでもない、ということ思い出してしまった。

よく二人の足音が聞こえると、2階に上がって行ったもの。チャーリーは、私の足音が聞こえると、威張った歩き方で、真面目な顔をしてベビーゲートの所で待っていてくれたわ。

「下に降りてくる？」

と言うと、答える代わりに、両手で私の首に抱きついたまま抱っこで降りて行った。

「ティーの所に行く？」

と言って床に下ろすと、お母様の部屋に走って入って行った。お母様は、まだ着替えがすんでいなかったけれど、チャーリーはバスルームからの声を聞いて、ドアの所に立って待っていたわ。

小さい方の居間で、チャールズとエリザベスと私が、朝食をとっていると、チャーリーはお盆の方を見ながら、砂糖壺（青い広東製）の蓋と

マーマレードの瓶の蓋を取り替えたりして遊んでいたわ。時には、チャールズが、

「チャールズ君、コーンフレークスを食べるかい？」と聞くと、
「ウン……。」

の返事。

「今、なんて言ったのかな？」

「はい、くたしやい。」

……でも、私は殆ど何も憶えていないわ。——もっと、憶えている筈なのに……。

ブレッキンリッチ邸での夕食。チャールズは、苦虫を噛みつぶしたような顔をしている。ヘンリーは悲嘆にくれていたが、同情的である。アイダは、とても親切で包容力がある。私はすっかり老けてしまったような気がして、気が重かった。

いかなる神々にも

しばし感謝の気持ちを捧げたい⁽¹⁵⁶⁾

5月27日 金曜日

エングルウッドにて

エリザベスをロックフェラー研究所に検査に行くよう説得した。皆、とても辛かった。

(156) この2行は「生あるものは必ず滅び／死者は決して蘇らず／最も疲れはてし川も／どこかの海に安全にたどりつくことに」のあとに続く。アルジェノン・チャールズ・スウィンバーン作『プロセルピナの庭』より。
〔プロセルピナは、ローマ神話に出て来るジュピターとケレスの娘。四季の神、ギリシャ神話では「ペルセポネー」に当たる。〈冥界の神〉ディースに連れ去られその女王にされた。〕

5月28日 土曜日

エングルウッドにて

少し涼しい。ジェイおじ様の所へ行った。おじ様はとてもがっかりしていた。彼にとって人生の慰めになるものはなく、私は何も言えなかった。彼に比べれば、私は強いと思ったわ。

「誘拐される数日前に、ここへ来たのが最後だったね。(自分の足元を指差し) ここで、ポーカーのチップで遊んでいたなア」。

私は、あの子が何で遊んでいたのか思い出せなかったが、今それを聞いて、思い出すことの喜びと悲しみに耐えられず泣いてしまった。

ロックフェラー研究所へ。診察の結果報告。(お母様の)お誕生日に家に帰れるので、エリザベスはとても喜んでいる。お母様と私は、ベランダに座って話をした⁽¹⁵⁷⁾。タイル貼りの床、川、ゆっくりと川をいく船、鉢植え、静けさ——前と同じ重い気分の中で、また希望を失っていく。

いろいろな人が訪ねて来ては、お喋りをして帰る。言葉にならない同情と、目には見えない同情。お母様が帰宅。車の窓に顔が映っている。

エリザベスは、涼しげな緑と白の水玉模様の柔らかいシフォンの洋服に緑色のベルトをしている。その姿は白い鳩のように、いえ、黒苺の花が満開の小枝のようだわ。

コンも帰宅。彼女も花の盛りのように素敵。

5月29日 日曜日〔お母様の誕生日に〕

エングルウッドにて

エイミーおば様とチェスターおじ様がランチに出かけてきた。派手な青と黄色の新しいパラソルの下に、お母様へのプレゼントを置いた。

ものすごく鮮明なあの子の夢を見た。チャーリーは死を宣告されていた。あの子は走っていた。その髪はクルクル巻いて、もつれていた。

(157) 著者の母は医者から、エリザベスは、リウマチ熱による重い心臓弁の障害を患っていることを伝えられた。したがって、伝染病にもかかりやすく、当時は彼女のように発病したら、5年以上は生きられなかった。

(自分が目覚めているのかもわからないけれど、あの子がどこかへ行ってしまったということはわかっていた) 私は、

「ベティ、覚えていないけれど、チャーリーの髪はどういう風にとかし
たかしら？」

と言った。その後すぐ私は、あの子の命を奪う人に対して、獣^{けだもの}のように激怒していた。本当にあの子に逢ったかのような夢だった。それは、一日中頭から離れないメロディーのように、優しく爽やかに私の心に残った。

5月30日 月曜日

静かな一日。爽やかな晴天に、チャールズと私は、庭を散歩したり、犬達と遊んだりして1日を過ごした。エリザベスと私は、ベランダでお喋り。もう、楽しかろうが、悲しかろうが、〈騒ぎはこりごり〉というのが、私達の気持ちだわ。エリザベスは、ダルパートン⁽¹⁵⁸⁾に行つて静かに日光浴をしたり、本を読んだりするだけで十分のようだ。あまりにもいろいろなことがありすぎたからか、それとも、私達はすこし大人になったからか解らないが、二人共同じ気持ちでいる。今はただ戸外で、太陽の下に座っていたい。そして、波のように押し寄せる緑の桎の葉のカサカサという音や、小さな虫の音のそんな自然の中の囁きや羽ばたきが私の中へ、私の皺や傷の中に染み込み、総てを静穏な澄みきったベールで覆ってほしい。その透き通ったサテンの上に、過去の気持ちや考えを蘇らせよ。でも、私は今は何も読みたくない。考えることも、働くことも嫌だ。ただただ、静けさの中にとつぷりと浸っていたい。

エリザベスと一緒に座ってお喋り出来たことは、本当に良かった。彼女もとても落ち着いていて、幸せだった。二人共同じ心境にあり、今の気持ちを分かち合える。

お母様といろいろなことを話しながら、長いお散歩に出掛けた。お母

(158) イギリスのサマーセット州にある。エリザベスが夏を過ごしに行く所。

様はこれから誰一人頼る人もなく、一人でずっと悲しみに立ち向かい、耐えて行かなければならないように見える。

6月1日 水曜日

エングルウッドにて

エリザベスが出発するので、^{あわただ}慌しい。エリザベスは、もう出掛けるというのに、まだ机で小切手を切ったりしている。長距離電話も掛かって来ている。

「まあ、お電話ありがとう。……本当にごめんなさいね」

云々。メリーが遠慮しながら、でも、落ち着いた表情で、3分おきに私の机の方にウロウロとやって来る。

「私が船で読む手紙は、もう出来ているかしら？ 荷物は、もう全部出来ていたわ。」

帽子をちょっと横にかぶり、毛皮を腕にかけながら、ギュッと握りしめたエリザベスの手は瘦せて細かった。お別れの握手。

この慌しさの中で、ピーター（エリザベスの飼い犬）と私は、何となく部外者という感じで居心地が悪くあたふたしてしまった。

「パスポートは持ったわね？」

笑い声と共に去って行った。

メリーはすぐさま、エリザベスが使っていた部屋を片付け始め、カーベットに掃除機をかけていた。私は、人がいなくなった後の、まるで死んだような静けさがだいたい嫌い。そんなに早く片付けなくてもいいのに、まるでそこに居た人をすぐに忘れるかのようで。一緒にいた仲間の温もりが消えて、単なる「部屋」や「主寝室」に、サッサと変わってしまうかのように……。

チャールズは、トレントンから遅く帰宅。

1932年6月1日 水曜日〔姉宛の手紙〕

（船に乗るまで読んじゃダメよ！）

愛するエリザベスへ

この冬は、本当に私にあんなに良くして下さったのに、私の方からは十分感謝の気持ちも伝えず、ごめんなさいね。でも、あなたのことはいつも、何をしていても、どこにいても忘れていなかったわ。あなたのことを考えることが、私にとって大きな喜びなの。あなたも、太陽の光と空に映えるブナの葉の模様の清々しさを吸収して、静かな瑞々しきで総てのことを覆ってしまっているといいわね。私もここで、そうしながら、あなたのことを考えているわ。二人共、秋になったら、きっと輝いていることよ！

お母様のことは心配しないで。これから2週間はおばあちゃまの所へ行くし、渡欧の支度で忙しいので⁽¹⁵⁹⁾大丈夫だと思うわ。それに、コンやドゥワイトにアニー伯母様も、「みんなで、はしゃいじゃいましょう！」というムードになっているから、お母様もきっと元気になるでしょう。

ジェームス・スティーヴンスの『山羊の道』という詩を覚えているかしら？

曲がりくねった小道が
静かに振りそそぐ太陽の下で
ヒースの陰から出たり、隠れたりしては
丘の上まで続く。
来る日も、来る日も
静かに振りそそぐ太陽の下で

(159) 夫を亡くした後初めて、アンの母・モロウ夫人は、ヨーロッパ旅行へ出掛け、エリザベスと逢うことになっている。

こちらで草を食み、
あちらで草を食べて、
歩きまわる。
今、ヒースの小枝を口にして、
今度は牧草を頬ばる。

.....
そばに寄ると、山羊たちは逃げる。
急に荒れ狂ったような声を上げ、
跳んだり、こっちをじっと見つめたり
跳ね上がったりは、
日溜まりの静けさの中へ
葉一枚動かない
ハリエニシダの繁みの中に
静かにうずくまる。
日溜まりの孤独の中に
もう一度、静かにうずくまって考えにふける。

.....
私も山羊たちのように
日溜まりの静けさの中で
じっと考えていたい。
人目につかない、踏み固められた道からさまよい出て、
一人日溜まりの孤独の中で、深く考えたい。

私は、絶対見つからないものを、
何か見つけるまで考え続ける。
私の胸の奥底のここに、うずくまっている何かを見つかるまで。

日記

1932年6月2日 木曜日

エングルウッドにて

ローラとジョージ・スティーヴンスの夫妻が、夕方来訪。私達はテラスに腰掛け、黒い木々のシルエットや芝生の上に広がる家の灯りを眺めながら、これから経済的で、安全で、なおかつ幸せに住める所はないかと、いろいろ話し合った。都市には、ストレスがつきもの、田舎に住めば刺激がない。もう、わからないわ！ 頭が理論的に働かないの。

気は重いし、身体も重いし、疲れ果ててしまって、複雑なことも、複雑な人もイヤ！ 健康と子供達とチャールズ、それにその下でくつろげる本があれば、それで十分だわ。

刺激的なことは、もう結構。今は、何も考えたくないし、読んだり、思案したりすることもイヤ！

お母様は姿勢良く腰掛けて、ジョージと本や人の話をしている。まるで、鋭利な刃やいばのような洞察力をもって、熱心に話し込んでいる。私の刃は、すっかり鈍ってしまっているわ。

6月3日 金曜日

エングルウッドにて

あの旅行のことを⁽¹⁶⁰⁾、重い足を引きづりながら、書こうと努力した。

トムおじさん⁽¹⁶¹⁾とパーチさん⁽¹⁶²⁾は、庭で夕食をとっている。彼等の声にも、会話にも、パパが息づいている。彼等の会話を聞いていると、パパの話が懐かしげに出てくる。パパの深い素敵な声が聞こえ、包容力のあるパパの優しさが私達を包んでくれる。

(160) 1931年の東洋への飛行のこと。

(161) トーマス・コ克蘭。J.P. モルガン社の役員、父の友人。

(162) スティーヴン・パーチ。ケネコット銅山等、その他の鉱山会社の社長で、後に会長。モロウ家の友人。

渴き、葉が落ち、枯れはて
 ついには倒れて、丸太となる。
 その日限りの生命の
 五月の百合はいよいよ麗しく
 その夕べには、はかなく散りはてても
 それは、輝き花咲く百合だった。
 短い生涯にも真実の美はあり
 束の間の生命にも完成はあるのだ。

ベン・ジョンソン

私は、「それは、輝き花咲く百合だった」というところが好きです。

日記

1932年 6月6日 月曜日

エングルウッドにて

帰宅してみたら、スキーンとボギー⁽¹⁶⁴⁾がいなくなっていた。先週の
 土曜の夜以来だから、きっと盗まれてしまったのだろう。こんなことに
 ならないように、犬小屋を建てたのに……。それまでは、2匹とも家の
 中に入れておいたのだが、いなくなった日の夕方に、犬小屋が完成した
 とは……。

バンクス⁽¹⁶⁵⁾は、私に何と言って知らせようかと苦心していたが、
 「迷子になってしまいました、無事に帰ってきますよ」
 と言った。

私は、ガックリしてしまった。疲れがドッと出た。もう「他のことを

(164) エリザベスの飼っているスコッチテリア犬。

(165) セプトマス・バンクス。モロウ家の執事。

考えよう」と努力しながらの生活や、悪夢が現実となる辛さに、私はひ
 どく疲れてしまった。大したことではないが、私の今の不安、そして何
 にでも不信感を抱く気持ちとが重なる。もう、戦うのには疲れた。

6月7日 火曜日

エングルウッドにて

チャールズが、1枚のメモを持って帰って来た。
 「ミセス・リンドバークへ、ワンちゃん達はここにいますよ。」
 そこへ、尻尾を振り振り、歯をむき出して笑いながら入って来たスキ
 ーンが、ゴロンとお腹を見せてひっくり返ったわ。

6月8日 水曜日

エングルウッドにて

音楽のレッスン。すっかり初心者に戻ってしまった。楽譜は読めない
 し、リズムもとれない。ハーモニーがちっとも理解出来ない。……どう
 しよう。指はまるで、階段を昇り降りする老婦人のようだ。
 ブリスさん⁽¹⁶⁶⁾はとても優しく、親切で思いやりがある。
 「音楽の勉強は、他のこととは違って、年をとるにつれて上達するもの
 です。」

6月9日 木曜日

エングルウッドにて

ホーリーさん⁽¹⁶⁷⁾が、チャーリーを描いた小さな肖像画を持って来て
 下さった。
 1日の行動を時間で区切って計画したけれど、2時間も無駄にしてし
 まったわ。音楽に夢中になる。楽しいが、単なるごまかしにすぎないの

(166) コーネリウス・ブリス。(88)を参照。

(167) マーガレット・ホーリー、画家。チャーリーの写真から小
 さな肖像画を描いた人。

渴き、葉が落ち、枯れはて
 ついには倒れて、丸太となる。
 その日限りの生命の
 五月の百合はいよいよ美しく
 その夕べには、はかなく散りはてても
 それは、輝き花咲く百合だった。
 短い生涯にも真実の美はあり
 束の間の生命にも完成はあるのだ。

ベン・ジョンソン

私は、「それは、輝き花咲く百合だった」というところが好きです。

日記

1932年6月6日 月曜日

エングルウッドにて

帰宅してみたら、スキーンとボギー⁽¹⁶⁴⁾がいなくなっていた。先週の土曜の夜以来だから、きっと盗まれてしまったのだろう。こんなことにならないように、犬小屋を建てたのに……。それまでは、2匹とも家の中に入れておいたのだが、いなくなった日の夕方に、犬小屋が完成したとは……。

バンクス⁽¹⁶⁵⁾は、私に何と言って知らせようかと苦心していたが、「迷子になってしまいました、無事に帰ってきますよ」と言った。

私は、ガックリしてしまった。疲れがドッと出た。もう「他のことを

(164) エリザベスの飼っているスコッチテリア犬。

(165) セプタマス・バンクス。モロウ家の執事。

考えよう」と努力しながらの生活や、悪夢が現実となる辛さに、私はひどく疲れてしまった。大したことではないが、私の今の不安、そして何にでも不信感を抱く気持ちとが重なる。もう、戦うのには疲れた。

6月7日 火曜日

エングルウッドにて

チャールズが、1枚のメモを持って帰って来た。
 「ミセス・リンドバーグへ、ワンちゃん達はここにいますよ。」
 そこへ、尻尾を振り振り、歯をむき出して笑いながら入って来たスキー
 ンが、ゴロンとお腹を見せてひっくり返ったわ。

6月8日 水曜日

エングルウッドにて

音楽のレッスン。すっかり初心者に戻ってしまった。楽譜は読めないし、リズムもとれない。ハーモニーがちっとも理解出来ない。……どうしよう。指はまるで、階段を昇り降りする老婦人のようだ。

ブリスさん⁽¹⁶⁶⁾はとても優しく、親切で思いやりがある。
 「音楽の勉強は、他のこととは違って、年をとるにつれて上達するものです。」

6月9日 木曜日

エングルウッドにて

ホーリーさん⁽¹⁶⁷⁾が、チャーリーを描いた小さな肖像画を持って来て下さった。

1日の行動を時間で区切って計画したけれど、2時間も無駄にしてしまったわ。音楽に夢中になる。楽しいが、単なるごまかしにすぎないの

(166) コーネリウス・ブリス。(88)を参照。

(167) マーガレット・ホーリー、画家。チャーリーの写真から小さな肖像画を描いた人。

かしら？ この3年間、私は何もして来なかったのかしら？ それ以前には、何かしたのかしら？ 何の役にも立って来なかったのではないか？ 役に立とうと思ったら、何でも公にしなければならぬのか？ 人に何かを与えることも量れるものなのか？ ものを書くことを口に出すが、書かない——というよりも、書けないのだ。メモ帳を目の前にして、何とか書かねばと、自分に強いる。しかし、心のこもらない味気ない文章しか書けない。

いろいろ分析してみると、女性と男性では、悲しみの受け入れ方と克服の仕方が違うと思う。女性は、自分から進んで両腕を広げて悲しみを受け入れ、生活の中の全面に浸透させてしまう。生活の隅々まで悲しみが拡散し、蔓延してしまい、生活の総てが悲しみの上に展開して行く。その反面、男性は悲しみを濃縮し、一挙にその辛さを呑み込んで、その後客観的に全く違ったことを始めて、総てを忘れようとする。だから、チャールズも、

「カナダのペーカーレイクのことを書いたら、どう？ 何の関係もないじゃないか？」と言う。

まさに、それ！ 何の関係もないわ。私の気持ちがかもっていない。私を動かすものは、私の中のあの強烈な感情だけ。あの子への愛、総てはそこから始まるもの——家が欲しい、子供も欲しい、チャールズと私の家族のために出来ること。いずれは、この動物的な感情より多くのものを求めるようになるだろうが、今はまだその時期ではない。家庭への一番の近道は音楽だから、音楽が手っとり早い出口でもある。私はチャーリーに音楽を教え、あの子が歌い、楽器を弾き、身体でリズムを取り、満面の笑顔を見せてくれることを望んでいた。もし、チャールズが死んでしまったとしたら、彼が、私がものを書くことを望んでいたからといって、何かを書きたいと思うだろうか？ まず、自分自身が生きていける

かどうか……。もしも、生きていけるのなら、書くだろう。今、その時の感情を払いのけられないのが、恐ろしい。それは、耐えられない重荷かもしれない。

毎朝（夢を見なくても）、あの子と一晩中一緒にいたようなぼんやりとした気分で、目が覚める。毎晩、寝る前にはあの子のことを思い描く。あまりにもはっきりと思い出すので、目の前にいるようにその顔が見える。後は、眠っていても、無意識に思い続けている。私にとっては良いことだ。何故なら、昼間のあの子の思い出は、日増しに私から遠ざかっているから。例えば、あの子の洋服をもう3回も、4回も眺めているが、あの子はもういないの。

1932年6月10日〔義母宛の手紙〕

エングルウッドにて

今日は「あとたった2ヶ月」（かなりの確率で）と言える日なので、良い気分です。少し早まるとよいと思うのですが、チャールズはそれは無理だと言います。

「男の子だったら、何ていう名前にしましょうか？」

と言うと、チャールズはただ笑って、

「アン！」

と言うのです。

彼は、6月の終わり頃のワシントン行きの他には、今はどこへも行かない予定だと思います。私は、またピアノの練習を再開したいと思っています。ばかばかしいとお思いですか？ チャーリーが、いっしょに踊ったり笑ったりするような曲が弾けたら良かったのに、とつくづく思っているのです。あの子は、私が歌うと、踊ったり笑ったりしましたから……。

ですから、子供のそういう姿を見たくて、ピアノを習おうと思ったのです。お母さまがあの子の事をおっしゃって下さる事は、何でも、本当に嬉しくて仕方ありません。伺っていると楽しくなります。

いただいたオルゴールはその後、鳴らしていません。あの子が自分でネジを巻いていましたでしょう？ メロディーに合わせて身体を揺らしたり、踊ったりしていたのです。オルゴールを鳴らすと、あの子の事がすごく鮮明に思い出されるのが、わかっているのです。

私がすっかり暗い気持ちになっていると、お思いにならないで下さい。本当にそんなことはありませんから。ただ、あの子のどんな小さな事でも思い出して、私の心の中のあの子を元気で幸せのままにしておく、とても幸福な気持ちになるのです。

家や今後のことについては、途方に暮れています。私とチャールズ（チャールズはこのことをよく話題にします）が、あの美しい家でまた安心な気持ちになれるかどうか分からないのです。これは時間のかかる話ですし、お母さまにご相談したいと思っています。でも、チャールズはもう決して仕事で家を空けることなど——私と子供たちを守る武器もなくおいておくことなど——出来ない、と言います——それなのに、私達は、子供たちが独立心を持って育ってくれることを願っているのです、チャールズ自身のように。

1932年6月10日〔姉宛の手紙〕

エングルウッドにて

愛するエリザベス

いつもこうね。あなたが行ってしまって、毎日がどんどん過ぎて、気がついたら、もう何週間もたっていて、あなたがいなくてこんなに淋しいのに、ちゃんとあなたにそれを伝えもしなかったわ。でも、こちらは

このところ、もうてんてこ舞いなよ。いなくて、よかったわね！

誰かが、お昼ごはんか晩ごはんかお茶にいらしているし、お母様は、エイダ・コムストック⁽¹⁶⁸⁾さんか、ゼイディーかトムか、ニールかポーリーンか、そうでなければ、誰やかれやと会うことになっていて、「遅れないように」と急いで町に行ったり、家に戻ったり……。

こんな時に、バーチさんたら、別荘で午後を過ごして、それから「夕食もどうぞ」ってお招き下さってね。それがすごく強引だったの。とても良い方だけれど、言い出したらきかないの、わかるでしょう？ それで、私とチャールズとお母様とで夜出かけて行って、それは贅沢なご馳走をいただいたのよ。スープと千鳥の卵とソフト・シェル・クラブ^{*50}、マッシュルーム・トーストと、口にリンゴをくわえた子豚と、野菜とキジ（詰め物をしたものだ。まだ羽のついたキジがお皿に乗せられて、その目がスライスされたキジのお肉の方を見ているの）、ハム、サラダ、アイスクリーム、ケーキ、等々。

バーチさんは、私達のために、何でもして下さろうとしていたの。私達を外に連れ出して、池で釣りをさせて下さったり……。でも、私は釣り針を頭の上の柳に引っかけてしまったし、ちっちゃくて可愛いお母様は、ツイードのたっぷりしたコートに身を包んだまま、あの長い竿を水の上でやたらとゆらゆらさせて、草や棒切れが釣れただけなの。手にあの巨大な釣り竿を持って、池の上に身をかがめたお母様を見ていたら、パパのような気持ちになっちゃったわ。

その後

私達は、死と恐怖の中に生きているみたい。ヴァイオレット⁽¹⁶⁹⁾が食料庫で見つかったの。初めは気を失っているのだと思っていたら、死ん

(168) スミス大学の学部長。マサチューセッツ州ケンブリッジのラドクリフ大学長（1923～43）でもあった。

*50 脱皮したばかりの蟹で、甲羅が柔らかいので、丸ごと食べられる。

(169) モロウ家のイギリス人メイド、ヴァイオレット・シャープ。

でいて、今は自殺したということがわかりました。ヴァイオレットの話がころころ変わるので、警察がもう一度尋問したいと言ってきたばかりだったの。ああ、この犯罪は何てひどい不幸と悲しみを引きずっていくのかしら。一体いつになったら、何も起こらなくなるのでしょうか？ それどころか、増える一方みたい。まるで水に小石を投げた時に広がる波のように……。お母様とジョーは、ヴァイオレットが息を引き取る時側にいて、気を失っていると思っていたから、意識を取り戻させようとしていたの。お母様は動揺していますが、幸いにも、あと少しでここを離れるでしょうから……。これから先は、チャールズの仕事なのよ。

お母様が、本当に静かできれいなところに行くのが、とっても嬉しいわ。

日記

1932年6月11日 土曜日

新聞の第一面は、またもや、ヴィオレット・シャープの自殺のことを書き立てている。私の息子の思い出は、この突然襲った事件によって向こうへ押しやられてしまった。人々は結論にとびついているが、それ以外のことはわかっていない。

ルブリーさんが、お昼に出かけて来て下さる。

「色々な事が多すぎて。人生をもっと簡単にしようじゃないか。」

「持ち物だって、人生同様一時的なものでなければね。石造りの家など建てずに、テントか移動式の小屋に住めばいいんだよ。人生が変わったり、壊れたりした時は、テントも持って行けるじゃない。」

ファレーズのポート・ワシントンへ行く。^{すいかずら}忍冬、とても静かな海、さ

ざ波、ところどころ空の金色を映すなめらかな水面。そして、グッゲンハイム夫妻はとても穏やかで落ち着いていて、寛大で、そしてありがたい事に、話題は世界を取り巻く問題、企業の合併、政府による価格統制、労働側によるオーナーシップ参加、週5日制等についてであった。あの方たちは自分の世界を信じているから、あの方達の世界には悲惨なことなど起こり得ず、安全なのだわ。私達は自分の世界を信じなくなってしまったから、私達の世界はひっくり返り、何が起ってもおかしくないわ。一旦、人生を信じなくなってしまったら無防備になり、悪や悲しみや不幸が押し寄せて来るのを防ぐことは出来ない。「信頼の喪失は、財産を失う事より重い」エミリー・ディッキンソン

1932年6月13日 月曜日 朝〔義母宛の手紙〕

ファレーズにて

金曜日の朝お手紙を差し上げた時は、まだ何も知りませんでした。その後、メイドのヴァイオレットが、「また警察の人に会わなければならぬ」のだと伝えられた後に、気を失ったと知らされました。その後で、彼女が死んでおり、青酸化合物を飲んだことがわかりました。

家中の者が、一生懸命に何とか、ヴァイオレットを助けようとして、ただ本当のことを言えば大丈夫だと言っていたのです。でも、彼女は明らかに怯えていました。どうも非常に神経質で、気持ちが不安定な人だったようです。本当に隠す事など何も無かったのに、自分を追い詰めてしまって、警察の取り調べなど耐えられないと思いこんでしまったのです。あの人は、調べられてはいましたが、警察からはそれほどひどい扱いは受けてはいませんでしたのに……。夜遅くに調べられたことも、(他の人同様)触られたこともありませんでした。お医者様もずっと診て下さっ

ていました。

それにしても、すべてがひどく残酷で悲しいことです。私達は、本当に人の事はちっとも解らないものです。

日 記

1932年 6月13日 月曜日

エングルウッドにて

精神的にまいっていて——力がない。頭も心も錨が抜かれ、揺さ振られ、何にでも引っくり返されてしまいそうに、不安定で怯えている。コントロールを失う寸前のようなおぞましい気持ち。チャールズは力に満ちている。

新聞はひどい警察批判をしている。《無実の女性いじめによる死》。イギリスの新聞は非難の嵐。彼女は無実のようだ。とても不愉快だ。なんて下劣で無様な世の中——私達は真実を何も解っていないのだ。

自らの命を断った人の死は、他の人の死のように、完全な、呼び戻せないような死ではないような気がする。そんなにもサッサと、割合楽に逃げられるものだろうか？ 目を見開いたまま「死」に近づき、「生」と「死」を分ける糸を目を開けたまま越えるのなら、向こう側へ行く道を知っているはずである。知っているから簡単に行ったり来たり出来るのだ。ヴァイオレットは、この人生にとどまりたくないのかもしれないが、その意に反して、それほど遠くへは行っていない気がする。

6月14日 火曜日

エングルウッドにて

よくある「お母様出発の前」の日。「ちょっとだけ、お目にかからせ

て……」と、お別れを言いを訪れる人々。

お母様は本を仕分けしたり、手紙を書き取らせたり、洋服を試着してみたり……。ジョーは、鉛筆と紙をもって電話中。イーディス叔母様は、お母様とお話したくて待っているところ。お母様は15分おきに、

「テーブルのタイルを頼まなくては！ アン！ ジョー！ イーディス！ さあ、行きましょう。」

すると、誰かがさえぎって、

「カッターさんが見えです」

「カーさんが……」

「サリバンさんが……」

大勢の人が待たされ、中には走っている人もいる。車は町へ行ったり、戻ったり。

「何かいるものがあるかもしれないから、ヘンリーは来る前に電話するって。」

ドゥワイトはのんびりと、

「いいよ、お母様、ベデカーの旅行案内はいらないよ」

なんて言っているわ。

ハッティおば様とジェイおじ様⁽¹⁷⁰⁾が、夕食前に来訪。手足治療専門医も来る。コンは、元気に姿を表わす。帽子の下からほつれたカールがはみ出し、コートの前ははだけ、手は本や鞆でいっぱい。そして、顔を輝かせて

「やっと着いたわ！」

玄関のホールは、最後に詰め込むカバン、コート、バスケット、お土産の山。

お母様 「途中で、ダンカンさんのお宅に寄りたいの。ほんのちょっと

(170) 父の兄、ジェイ・J・モロウ司令官とその妻。

だけです。」

どやどやと車に乗り込む。ドゥワイトは、本を忘れ二階に取りに上がり、コートを気軽に引っ掛ける。可愛くおしゃれなコンは、キスを受けるためにふっくらとした頬——なんてなめらかで、丸みがあって、健康的な何か——をこちらにむける。若さでいっぱい。お母様はチャールズの手を握り締めて、小幅なはい足取りで玄関を出る。車がそろって出発。

家の中はとても静かだ。私達は座って本を読む。すべての生気が、この家から消えてしまった。そして、一緒に再びあの子も連れて行ってしまった。

1932年6月15日〔母宛の手紙〕

エングルウッドにて

愛するお母様

昨夜、お母様はおっしゃったでしょう、小さな女の子に言うように、「私がいなくても、全然淋しくなんかないわよ！」
って。でも、私はひどく淋しいのです。お母様が私達にとってどういう存在であるか、誰もわかっていません、私もそうです。もしわかってしまったら、まるで無意識の中でしか人の安心は得られないかのように、お母様の存在が私から奪われてしまいそうで、こわいのです。「もし『彼ら』にあの人がどれほどの意味をもつか知られてしまったら、『彼ら』は妬むだろう」という異教徒のような感情です。

ホープウェルでの最初の週のことと、私のこよなき心の砦として、そして私に力を与えてくれるこよなき泉としての、お母様のことをひたすら考えています。

「そう、お母様が来るのだから……。お母様が着いたら……」
そして、来る日も来る日も、朝起きる理由もないように思える時には、「お母様は、もう下の階ね」
とか、お母様がニューヨークに行ってしまった、あのひどく長い間は、「今晚になれば、もうお母様が戻るから大丈夫だわ」
とか。そして、お母様はいつも一陣の風のような生気と、人生の喜びを持ち帰ってくれるのです、あの死のような日々でさえ。

お母様の力がどこから生まれるのか、私にはわかりませんが、私はただただ、その力をいただくばかりで、何のお返しもししていないように思います。今は、何もお返し出来ないのかも知れません。こんなめにあった人は皆、信じる気持ちを失ってしまい、一旦信じる気持ちが潰されてしまうと、傷つきやすくなってしまう。それは、あたかも信頼が、美しくきらきら光るガラスの鎧よろいのように、完全な状態である限りは、間違はなく人を守ってくれたかのようです。でも、それはとても壊れやすく、一度粉々になってしまうと、あとには何も残りません。

でも、ドゥワイトも、コンも鎧を持っています。コンは滑らかで輝くようなアメジストと金に、ドワイトは眩しいようなサファイヤの鎧に包まれているのがわかりませんか？　そして、二人の信頼する心が、人を完全なものにしてくれます。パパがいてくれたらどれだけよかったか、と感じています。パパの鎧は潰されたことはないと思います。私が、今そう感じられるのは素晴らしいことです。みんなそう感じていると思います。お母様、私達はみんなとても互いに近い存在ですし、これからも——生きている時も死んでからも——ずっとそうあり続けるでしょう。それは素晴らしいことですし、私は、本当にそうなると思っています。

この手紙はなんて悲しくて、そして、本当の気持ちを正直に書いた手

紙なのでしょうか。でも、口に出して言うのには、まだ時が足りないのです。私はいつだって、本当の事を言葉にするのを後回しにしまい、結局言わずじまいなのです。私達は、毎日毎日生きていくために、自分の感情と取り引きしているのです。私がお母様をたまらなく敬い、愛していること、お母様がいらっしゃらないと淋しがることを、お母様はご存じのはずですし、昨夜もわかっていらっしゃった。それなのに、お母様は、

「私がいなくても、淋しくなんかないわよ！」
などとおっしゃったわ！ ですから、こんな手紙を書くのはお母様のせいよ！

そして、お母様が戻られたら、私達はノースヘイヴンに行って、カムデン・ヒルズの青い色と石の冷たさと松の木のとげとげしきで、自分たちのための新しい鎧を作りますわ！

そうそう、もしお母様が戻られる前に、私に子供が生まれて、それが双子の女の子だったら、アンとエリザベスという名前にしたら、エリザベスに悪いでしょうか？ 心配なさらないで、戻られるまで名前はつけません。（もし、エリザベスが、エリザベスという名前の子が、我が家と将来のエリザベスの家庭との両方にいるのが嫌なようでしたら、私はやめます。エリザベスは、好きな名前をつけるべきですから。）でも、エリザベスという名前は私にとって、他のどの名前より大きな意味をもつのです。それに、エリザベスとアンという名前の姉妹なんて、本当に可愛らしいでしょう。……でも、いいの、それがエリザベスを少しでも悲しませたり、悩ませたりするのでしたら、私はやめておきます。どっちみち、双子は生まれないでしょうし、ちゃんとお母様が戻られるのを待ってから、産みますから——もしかしたら、双子の男の子をね！

日記

1932年6月17日

夜になると、頭の中の色々なものがその正体を失ってしまうのに、それらの感情的な部分はそのまま残っている。それらは、夢の中では、様々な色のリボンになって互いに絡まり合ったりするが、強烈で現実のものである。

そして、朝目が覚めると、私はそれをほどこきながら、
「私が夜の間ずっと争っていた相手は一体何だったの、このリボン？
そうだ、あの子はもういないのだわ。……そして、この結び目は？ エイミーおば様が私の、そしてあの子の誕生日に来るわ」
等々と考えるの。

金曜日

あのスー・ヴェイラントが昼食に出かけて来る——刺激的、打てば響く鋭さ、そしてもちろん、私を理解してくれる。元気づけられる。

「子供に愛情を注いだり、その子達を優れた立派な人に育てたりは出来るけれど、それ以上のことなんて、どうやったら出来るというの？ そうやって、世の中を良くしていくのじゃないかしら？」

「あなたは本質的に『存在』であって、彼は本質的に『行動』よ。あなたの方が釣り合っていない、なんてことはないわよ。なぜ、あなたの『存在』が、彼の『行動』を完璧なものにしていないというの？ 彼に『存在』以上のものを、どうやったら与えられるというの？ それから、もし、あなたが変わった人で〈自分の幸せのために、それ以外のものを〉というのなら、別にいいじゃないの。だけど、あなたが彼に与える最高

[アンの友人のスー・ベックは結婚した。]

のものは、彼の仕事を通して表われるのよ。』

1932年6月18日 土曜日

エングルウッドとロングアイランドにて

ハリー・デイヴィソンさん宅に出かける。⁽¹⁷¹⁾

他の人が、ローン・ボウリング（芝生でボウリング）をしているのを、遠くで座って眺めていた。知らない人々に交ざって見るチャールズの特徴のある歩き方——軽快に、落ち着いて、リズムにのって、それでいて力をぬいた——に、一瞬思いがけずうれしくなってしまう。私の気持ち

はいつも、
「この事を憶えておかなければ、あの事を憶えておかなければ、これは永遠のものとしておかなければ、私から奪い去られてしまう前に……。」

あの方（アン・デイヴィソン）の、明晰な客観性と美しい動物のような自制心の効いた不屈さと、あの頭の形が私は好きだわ。

それに、あの方たちはすごく好人達。デイヴィソン夫人⁽¹⁷²⁾と一緒にいると、自分が大きく幸せな人になった気がする。父と母のような温かで豊かな世界にいるようだ。

6月19日 日曜日

ロング・アイランドとエングルウッドにて

とても短いスカートをはいて、髪にリボンをつけたフランセス⁽¹⁷³⁾の小さなお嬢さん二人が、芝生でてんとう虫(ladybug)と遊んでいる。小さなハリー⁽¹⁷⁴⁾の赤毛は、その子たちのくすんだ金色の髪に届いてしま

いそう。
「レディバグなんだから、てんとう虫はおすがいないのかしら？」
ですって。

(171) 家族ぐるみで付き合った銀行家の友人。J.P. モルガン社の役員であり、第一次世界大戦の海軍飛行士。

(172) ヘンリー・P・デイヴィソン・シニアの夫人。

(173) ハリー・デイヴィソンの姉妹、ウォード・チェイニー夫人。

(174) ハリー・デイヴィソンの息子。

芝生と子供たちと平和がほしい、などとこれら全部と一緒にセットになって来るとは限らない事をつい忘れてしまう。

エングルウッドに帰る。家はとても大きくて暗い。

スキーンは、前に何度もしたように、私が二階のあの子の部屋に行くのについて来た。あの子がいなくて淋しいのだろうか。

6月20日 土曜日

エングルウッドにて

奈落の底のような朝

私はこれまでの人生でずっと、家族から、友人たちから、社会団体から、何かをしてもらったり、恩恵に与るばかりで、何もお返ししてはいない。完璧な条件が整うのを待ってから、返すを試みるのはいけない。これまでにチャンスもあったのに、ただ引き延ばしていただけだ。

何かをするのには、大学で専攻したことをいかすのがおそらく最もよいだろうが、それが嫌なら、ほかのことでかまわない。とにかく、決心して何かするべきだ、何か建設的なことを。

私の理論：

第一に、私は意識を持って生きねばならない。これにより、私は行動し、社会に何か与えることが出来る。

第二に、私の基本的な仕事は、より明るく、強く、良い子を育て上げることであり、その子らとチャールズを通じて、この人生で学んだことを、出来るだけ意識しながら、社会に還元していくことである。

今は、どんな考えも肉体的な事から発生するのだ。それに、女の人はいつだってそう考えていると思う。

テラスで食事をし、芝生でボウリングをし、「建設的な貢献」のことなど考えないでいられて幸せだわ。

6月21日

息がしづらく、だるい。赤ちゃんが私の肺を押し上げる。

『泉』を読んでいる⁽¹⁷⁵⁾。まさにこれだ。私が求めているのは、これ！この人は、ちゃんとわかっているわ！

「回転する歯車の軸が動かないのと同じように、頭と身体が活動中でも、心は動かない。」

6月22日 水曜日

エングルウッドにて

小さなチャールズと私の誕生日。

エイミーおば様とチェスターおじ様が庭での夕食のため来訪。

おじ様はショパンのプレリュードを弾く。

初めて、私の頭の中にあの子の顔を一瞬みることが出来た。

お腹の中の赤ん坊の、よくわからない夢を見た。

「あら、チャーリーと同じ笑い方をするじゃない。」

その笑い方には、はっきりとした特徴があった。元気な伸び伸びとした笑い、夜、二階でかくれんぼしている時のチャーリーのような……。

アリス伯母様⁽¹⁷⁶⁾のを見せて下さったあの子の8ミリフィルムにはがっかり。頭を振ってイヤイヤをして、話すのも何度も同じ言葉を繰り返すだけ。ほんの少しの場面以外は、私の知っているあの子ではないわ。

(175) チャールズ・L・モーガンの小説

(176) アン之父ドゥワイトの姉、アリス・モロウ。

6月24日 金曜日

エングルウッドにて

新しく建てる棟、新しい赤ん坊、等々の計画を立てていたら、すっかり興奮してしまった。同じ家でも、新しい場所で、また新しくはじめるというのは、元気が出る。

夜——あの子を忘れて生きるにはとても長い——面影がどんどんぼんやりとしてくる。頭がはっきりしている時でさえ、描く事が出来ない小さなあの子の亡霊。そうしたら、私の中の何かがこのことに反発したかのように、あの子の夢をたくさん見た。意識の表面の下に、あの子の面影をしっかりと保っているもうひとつの意識がある。しかし、朝早く目が覚めると、それを取り戻すことは出来ず、小鳥たちに腹がたったが、もう眠ることは出来なかった。

1932年6月25日〔義母宛の手紙〕

エングルウッドにて

飛燕草^{ひえんそう}はとても美しくて、背が高く、今でもあの美しい青い花は、ピアノのそばにあるテーブルの上で、そこが庭園でもあるように咲き誇っています。みんなが、「あの花はデトロイトから届いた」と言ったので（お母さまからお手紙をいただく前に）、お母さまからの贈り物に間違いないとわかり、お母さまがわざわざ贈って下さったことに感動致しました。きっと、お花が届いた日には、私達が皆、同じことを考えていたはずです。

ここでは、あまりにも何事も起こらないので、手紙でお伝えすることは何もないかのように思えます。チャールズと私は、泳ぎに出かけます。

チャールズは街で働き、本をたくさん読んでいます。私はピアノをのんびりと練習しています。

先週の週末、ハリー・デイヴィソン氏の息子さんのところで、とても楽しく過ごしました。チャールズは男性達と久しぶりに少し飛行し、私はただ^{あた}廻りをぶらつき、あのお宅の子供達を観察しました。その子供達は、幼い男の子が一人と女の子が二人です。

チャールズが子供達に接する時、とても自然に楽しむことをご存じでしたか？ 私のように自意識過剰ではありませんし、ハリーの子供達は、いつでもチャールズが大好きです。チャールズは大きなハンカチと10セント硬貨を持って草の上にかがみ、硬貨を消してしまいました。子供達は、チャールズの膝のところに座り、チャールズに憧れていました。彼は子供達に気遣いし過ぎることもなく、まったく率直で、自然に接しています——大切なのは、まさにそれなのだ、と思います。チャールズが自分の子と一緒にいるところを、早く見たいと思います。

明日、私達はホープウェルに行きます。カーティスの審理は、その近くのプレミントンで行われます。審理は、2、3日かかりそうです。「カーティスが残酷な扱いを受けた」こと、つまり「警察でひどい扱いを受けた」ことを証明するために、カーティスの弁護人が、ベティーとホワットリーに証言して欲しいと言ってきています。

被告の弁護側が考えているのは、「ベティーとホワットリーもまた、ひどい扱いを受けた」と、証言することです。私には、それで弁護側にとってどのような利益になるのか、理解出来ません。私は審理が早く終わることを切に望んでいます。それが終わったら、私達は平穏な生活が出来ます。

日記

1932年6月26日 日曜日

ホープウェルにて

チャールズとベティーと私は、ホープウェルへ。暑いデコボコ道を車で行く旅。あの家はホワットリーがペンキを塗り変えた後なので、白くてきれいに輝いている。爽やかで平穏。

再び家に帰ったが、事件の形跡は残っていない。ただ、ホワットリーが、古いあせたフェロタイプ^{*51}の埃を落として、それをラジオの上に立て掛けてあったくらいだった。そのフェロタイプは、どこかの風変わりな女性が私達に郵便で送ってきたもので、私達はそれを冗談のつもりで立て掛けたものだったが、もうおかしいものには見えなかった。

それから、階段のあの子の指紋を焼いた跡も。それは、捜査班の人達が化学薬品を使って、指紋を浮かび上げようとした場所だった。

あの子の部屋は静かで安らかであった。大きなフランス窓が一杯に開かれていて、あの捜査中でも、この部屋は安全で居心地がいい部屋であったが、今でも同じである。私は、ドアを開けたままにしておいた。

この家は、今では犯罪を連想させない。でも、私はエングルウッドで、日に日に気づき始めていたことを、ここで極めて強く感じた。それは、私のチャーリーへの愛情は、新しい子供が生まれても、何ら変わらないこと。私は、新しい子供が加われば、「今よりも良くなる」と漠然と考えていたけれども、あの子がいなくて淋しいという気持ちは、今までと同じだと思う。新しい赤ちゃんへの愛情は、これとは別に生まれ、育つだろうし、美しいけれども、また違うものである。チャーリーへの愛情と共存して生まれてくるのだろう。

私は、いつも、いつも、私の生涯を通して、チャーリーへの愛情を持ち続けて、生きることになる。ただし、私の日常の生活から次第に離れ、

*51 鉄板写真法。現像後の印画紙をクロームメッキした鉄板に密着し、加熱乾燥して、光沢のある写真に仕上げる方法。

もしかすると、今よりも生きるのが容易になるかも知れない。そうなつてくれないと、嫌だわ。

6月27日 月曜日

ホープウェルにて

午前中、ヒベン夫人⁽¹⁷⁷⁾に会いに行く。とても良い方で、明快な性格。「あなたが、私の娘をお気に召して下さるとよいのですが……。とてもいい娘なのですが、非常に引っ込み思案なものですから。」

と、パパが夫人に語ったと言う。彼女はとても率直にものを言い、正直で優しい方だわ。

重苦しい日、空は曇っていて茶色。トロピカル・グリーン、蒼々とした草木、降りしきる雨。

手紙を書いた。

午後、パロウ岬⁽¹⁷⁸⁾について、2時間か、それ以上書いた。それほど、難しくはない。けれども、〈うまく書けたわ!〉と言う時にある、満足感から生じる刺激を感じない。全体を通して、ひとつのはっきりとした主題が見えてこない。構想が足りないのである。これでは〈単なる物語〉にすぎない。私は、たったひとつのアイデアにじっと取り組んで、それを吟味に吟味する作業の方が好きだ。台座の上の磨かれた宝石のように……。でも、私はどっちもしていないわ。

夜、プリンストンまでのドライブに出かける。私達に気付いた少年たちに追いかけられる。チャールズは怒り、いらだつ。私も苦々しく思い、腹がたつ。あの道をドライブする。

「彼らはあの子の遺体を持って、こっちの方に行き、隠す場所を探して

(177) プリンストン大学総長夫人。彼女は、アンについての父親のモロウ氏のコメントをここで引用した。

(178) 『東方への空の旅』の中の1章。[1931年8月17日～18日付手紙参照。]

いたんだ。あそこではだめか？ 人家に近過ぎるか？ あの川は？ あまりに簡単に見つかる。」

平穏なホープウェルの町を通り抜ける。安全な家々、孤児院を通り過ぎる。あの人気のない丘を上がる——「ここだわ。」

私は、あの瞬間を超えることがない。私はいつも、事件が起こったことをもっと鮮明に現実として捉えようとしている。現実の方が、もっと容易に受け入れられるし、直視出来るし、乗り越えられると考えて……。私がそれを乗り越えることが出来るのは、ただあの事件に門を掛けて記憶の底に閉じこめ、よく使われる決まり文句に落ち着いてしまうことによってなのだ。「あれは、遠い昔に起きたことよ」「あの子は、誘拐されたことに気付かなかったの」、それに「私達は皆、死ぬのよ」。

あの夜、誘拐された事がわかった時、私は、

「そんなことがあるはずがない」

と言った。そして、チャールズが悔しそうに

「それが、起こり得たようだ」

と言った。その時私は、自分に向かって

「このような状況で、あなたは現実には直面することになる。あなたはこれまで、非現実的な滑らかな世界に生きてきたけれども、今、あなたはその現実には直面している」

と、言い聞かせた。それにもかかわらず、私は、決して、決して現実を直視してきていない。もし、私があの子の傷つけられた遺体を見ていたならば、現実を直視していただろうか？ 私はそうは思わない。なぜなら、実感しようとしているこの現実、自分の内面の問題であって、実感しようとしている事実の中にはないのだと、私は考え始めているからである。

6月30日 木曜日

ホープウェルにて

手紙。

音楽理論。

執筆。パロウ岬——うまく書けない。

息詰まるような暑さ。スクリーンが、私の椅子の下でハアハアと荒い息をしている。

この家の中で、私が自由で正常な精神状態で生きるのは難しく思える。あの窓、家のあちら側、通路に、私はいつも恐怖と好奇心を抱き、そして苦痛の中で、実際に何が起きたのかを知ろうとすることになるから。

7月2日 土曜日

ホープウェルにて

カーティスについての陪審員の評決は、有罪。

私があの子を最後に見て以来、4ヶ月になる。あの海外旅行よりも長い時間。私はあの頃のように、〈子供を持ったことはなかったのだ〉と失望の中で考える。あの子は、本当に逝ってしまった。

私は以前、悲しみを体験すれば、その人をもっと安定させるだろうと考えていた。あたかも、

「今、私は苦しさに堪え、強くなった。私は、もう恐れることはない。不幸な出来事が起ったから、私はもうそれを恐れる必要がない」と言えるかのように……。でも、悲しみは、私にはそんな効果をもたらさなかった。私の足下で、土台全体が揺れているのを感じる。私は、

「死」と隣り合わせであると感じている。

1年前には、私にはパパとあの子がいたわ。来年、誰が死ぬことになり、誰がここで生きているのだろうか？ 私はその時まだ、ここで生きているのだろうか？ 私にはわからない。私は死をひどく恐れ、それに対して何の武器も持っていないのだ。

そして、死が私のとても近くにあり、あたかも、死と手を携えて歩んでいるかのような気がする。

1932年7月2日〔義母宛の手紙〕

ホープウェルにて

ついに、公判が終わりました⁽¹⁷⁹⁾。誰も皆、ホッとしています。チャールズは毎日、法廷に行きました。ここを午前9時に出て、午後7時まで帰ってきませんでした。それから、今までとても暑かったのです。それにもかかわらず、チャールズは自己を抑制することや、精神的な覚悟という点で、たいへんに鍛えられていますので、人々は「彼がとても冷静で、質問に動じることも、何らの問題もなく、すべてに答えた」と

と、言っています。

ここでのこの一週間で、この家がどんなに良いところであるかわかりました。チャールズは、とっても満足そうに歩き回っては、「この家は、本当に素晴らしい家だ。みごとに設計されていることは、確かだよ。それに、なんていい材料を使っているのだろうか。傷んではいるけれども、今でもまだ新しく見えるね」と言っています。

それから、私達は、この家の前の野原を耕運機で耕して、種蒔きをす

(179) ジョン・ヒューズ・カーティスの裁判。(147)を参照。

る計画をたて、私は、家具やいろいろ小さな改善したいことを考えます。私達がこの家から離れるなんて、とうてい考えられません。この家は、事件前とはまるで違う家のようなのです。何も起こらなかった頃は、この家は本当に申し分なく、素晴らしいところでした。私達は、またいつかこの家を、そんな家にする事が出来るのでしょうか。ここで過ごした冬について、考えたくありませんが、私達はまだそんなに遠い先の事までは、見越すことは出来ないと思うのです。

1932年7月5日 火曜日〔母宛の手紙〕

ホープウェルにて

愛するお母様へ

お母様のことを、お母様の結婚記念日に思いました。どうしてかは、よくわからないのですが、私は最近、パパのことをたくさん、とてもたくさん考えました。あたかも、固い外皮が落ちて、私が再び、現実を感じる事が出来るようになったかのように。また、ある意味では、無感覚と悲しみとの間を揺れる振り子が、どういう訳か止まり、不変の価値が残り、また振り子が動いても何も恐れていないかのようにです。カーティスの公判の間に、ここで、ヒベン総長ご夫妻にお目にかかれて、ほんとうに良かったわ。パパのことをいっぱい話して下さったの。

それから私は、今年の今頃のことを思いました。私達は出発の準備も整い⁽¹⁸⁰⁾、とても幸せでした。私とチャールズが毎朝、パパのベッドの上に、何枚もの巻いた地図を広げて座って、なんて楽しかったのだろうと思ひ出しています。それから、パパがチャールズに喋らせて、パパの顔には半分楽しんでいて、半分信じられないといった表情が浮かび、「ヒャーツ、こいつはいい、今度は何をする気なんだい！」といったような顔つきで、私にこう言うかのように、肘で私を突く。

(180) 東洋への飛行のこと。

「本当に、そこを飛んで行くつもりなんだね！」

にっこりと笑って、私をつつ突くのよ。

引き延ばされた審理のために、私達が思ったよりも長く、ここに滞在しなければなりません。私達は明日帰ります。

数日前、チャールズが、こう言いました（その時私達は、丘の上のあの子が発見された場所を通り過ぎようとしていました）。

「それは、まったく重要なことではないんだよ、アン。そのどれにしても、重要かどうかは、よくわからないよ。僕達は『初め』と『終わり』で表現される、有限の値でしか考えないからね。」

それから彼は、あの〈過去と未来は、どちらの方が長い〉という、哲学的な問題について語りました。

ヘンリー大佐は、〈過去の方〉だと言います。なぜなら、未来は過去になり続けるから。

「だけど、僕はこの問題をこんなイメージで見ると。ある人が立っていて、巨大なはずみ車を見ているんだけど、そのはずみ車はあまりにも大きいので、一方の側のほんの小さい部分しか見えないから、その人には、あたかもはずみ車が自分から遠ざかって行くように見えるんだ」と、チャールズが言いました。それから彼は、

「人類は、いつでも未知なるものを恐れてきたんだ。それでも、人類がそれを理解した時、未知なるものは〈善〉であって、〈悪〉ではなかったんだよ」

と、話し続け、私は大きな力強さと慰めを感じましたので、この長いお手紙を書いたのです。その一部でも、お母様にお伝え出来たかしらと、思います。彼は、

「科学について勉強すればするほど、より一層僕が感じることは……」

などと、言い続けています。そして、ほとんどの人は、科学を否定的な哲学への道として使います。

お母様、私はお母様が、6輪のピンク色の花をつけたつる薔薇と、枯れたように見えた百合の新芽が顔を出しているのをご覧になれば、と思います。それから、ダイニングルームの大きなブルーの壺一杯に生けられた白百合と飛燕草（ひえんそう エンゲルウッドから）。そして、居間のアルコーブに置いてある明朝時代の磁器製の馬と調和している、オレンジ色の鬼百合も一緒に見ていただきたいわ。この家は今では、別の家のようにです。悲劇なんて、何年も何年も前の出来事だったように……。

1932年7月6日 火曜日〔義母宛の手紙〕

ホープウェルにて

お母さまへ

私達は、家とその周りの敷地に、いろいろなことを計画してきました。チャールズの頭の中にある最も重要なことは、「どうしたら、私達がこの家で、安全に住むことが出来るのか」ということです。武装した警備員で、この家を常時警備するのか？ または、数頭のよく訓練された警察犬を飼うのか？

彼はこのアイディアでかなり乗り気になり、日曜日に、プリンストンに行き、警察犬の何頭かを見ました。一番優秀な犬は、美しくて大きい「ウルフ」のような犬で、簡単には友達になってくれませんが、ある人には忠実だということで、チャールズはこの一頭がとても気に入りました。チャールズは、この犬と友達になろうとして、口笛を吹いてみたり、触ろうとしました。でも、触ろうとした時に、この大きい動物は歯をむき出して、うなりました。チャールズは、
「これはいい！ 知らない人になれなれしくない犬が欲しいんだ」

と、言いました。

訓練士の人は、⁽¹⁸¹⁾

「(チャールズが) 主人であるということを、犬に覚えさせるのに14日かかります」

と言いました。その後なら、チャールズはその犬と何でも出来るようになるだろう、ということです。でも、最初の数日間は、私達は犬を閉じ込めて、訓練士の人が不在の時には犬に近付いてはいけません。犬が、私達に飛びかかるかもしれないので、触ろうとしたり、犬の近くに行ってしまうのは、いけない、ということです。こういう犬の一頭が攻撃されたら、とても深く咬みつかります（私は、だんだん心配になってきました）。

彼が一度、その犬を車に乗せて、警察官に道を尋ねるために止まり、警察官が開いていた窓に寄り掛かると、犬が警察官の制服に大きな穴を開けてしまったそうです。

こんな話のどれも、チャールズの意気込みをそぐ様子はありませんでした。彼は、

「この犬を飼うのは、とてもいいことだと思う」

と、言いました。犬は家のすぐ外の囲いの中で飼われ、夜はそこで寝て、昼間はこの林の中を、私達とどこへ行くにも一緒に歩くことになり、誰かが私達に近付けば、必ず私達は気付くことになります。

さて、訓練士の人は、犬を警察の護送車のような感じの車に乗せて連れて来ました。それから、私達はガレージの扉にしっかりとワイヤを取り付けて、私達が再びガレージの中に入らなくてもいいようにと、訓練士の人が帰ってしまう前に、水を入れたボウルと藁の入った箱を置きました。犬にえさを与えるために、翌朝、また来るとのことでした。

犬が着いた時、彼の車の周りで、スキーンとワーグーシュが跳び跳ね

(181) ジョセフ・ウェーバー。シェパード犬のブリーダー・訓練士。

て、吠えていました。その時、あの警察犬が雷のような大きな声で吠え返したので、私達は、スキンとワグーシュを家の中に閉じ込めました。それから、訓練士の人が犬を紐につないで車から降ろし、チャールズと私は、一緒に散歩に出ました。主人が静かにしているようにと指示すれば、その犬が攻撃しないことは知っていましたが、私は、その犬から離れていたいと思いました。

それから、訓練士の人は、「パル」というその犬をガレージの中に閉じ込めたまま帰って行きました。チャールズと私は座ってその犬を観察し、スキンとワグーシュを家から出してやりました。2匹は、扉のワイヤの高さまで跳び跳ねて、吠えました。パルは歯をむき出し、大きな低い声を一度出しました。ワグーシュは3回ぐらいひっくり返り、スキンは弱い足を持ち上げて、私達の方に向かって甲高い声で、「キャイン、キャイン、キャイン」と、吠えながら戻って来ました。パルは、じっとしていることが出来ず、水の入ったボウルをひっくり返し、それから水が欲しいと、高い声で鳴きました。チャールズは、その犬に話しかけ始め、ワイヤを通して指示を与え、犬に〈伏せ〉をさせました。チャールズは、ワイヤから指を入れて、犬の背中をかいてやりました。そうしたら、パルは尻尾を振ったのです。

そこで、チャールズは、その〈ライオンのほら穴〉に入ってゆく決心をしました。私は、心配でした。でも、彼は棒を持って、扉をゆっくりと開け、犬に伏せるように命じました。犬は、簡単に伏せをしました。それから、チャールズはボウルを取り、水を入れました。その間ずっと、彼は犬をおとなしくさせていました。とうとう、彼はパルに（輪縄式首輪をつけ）紐を付けて連れて出ることに決め、犬をガレージの外に連れて出しました。チャールズは、その間ずっと、犬に自分の言うことをきかせようと心がけました。パルは少しずつ、すべての合図に従い（訓練士

の人が、合図をチャールズに教えてあったのです）、夕方までには、チャールズの一步一步についてゆくようになり、私達はみんな、もう安全だと感じたのです。

ワグーシュのことでは、実に良い経験をしました。ワグーシュは、最初の出逢い以来、まったく恐れを示さず、夢中になってパルと遊びます。この大きい犬は、ワグーシュを前足で倒すことが出来るにもかかわらず、決してワグーシュを傷付けることはありません。2匹の犬は、今ではお互いのことをとても気に入っていて、何時間も遊んでいます。スキンはまだ、「キャン、キャン」と吠え、ソファの下に隠れます。

翌朝、訓練士の人は、チャールズが見事に、犬を自分に手なずけたのを見て驚き、またとても喜んでくれました。チャールズは、パルがいつまでも私達の友達であり、また私達を守ってくれるということを確認しています。彼は、ここに住む時には、パルをここに置いておくつもりですが、今は、「もう大丈夫だ」という確信を得るために、パルをいつも側に置いておきたいと思っています。それで、私達がエングルウッドに行く時は、チャールズはパルを連れてゆくつもりです。

チャールズが、ライオンの調教師であったことをご存じでしたか？これが、とても恐ろしいという印象を与えてしまったのではないかと思っています。私は最初は怖かったのですが、パルも今ではここが自分の家だと理解して、とても素直にしています。また、パルはとてもよく訓練されているので、何をしても、口で言いさえすれば止めます。

私は、子供をパルと一緒に置いて行かないとは思いますが、チャールズは、そうするといいます。もしパルが、私達の子と仲良くなれば、それは、最高の保護になるということです。実際は、まったくその通りだとは思いますが、保護過剰になると思います。もし、よその子供達が、

ウチの子を叩いたとしたら、パルがその子供達を傷つけるかもしれません。ですから、それも気をつけなければなりません。

この手紙は長い手紙ですが、このことにはとても夢中になってしまいました。それに、これでチャールズが〈この家は安全だ〉と感じるようになります。もちろん、私達が警察犬を飼っているということが知られるだけでも、それだけで、面倒なことの大半が片付くことになります。見物人が来なくなりますし、パルがそのような犬であるという評判がある間は、パルをどう猛にしておく必要はありません。それに、パルは今、明らかにどう猛ではありません。ただし昨晚は、特別でした。チャールズがパルを試すために、警察官が来た時に、パルに「あれは何だ。パル！」と、言いました。すると、パルは毛を逆立てて、外に出ようとして、大きな声で吠えました。それから、チャールズからの指示で、パルはおとなしくなりました。

日記

1932年7月6日 水曜日

ホープウェルとエングルウッドにて

私がパルの責任を持つことになった。〈ユーナとライオン〉^{*52}みたいな気がする。大きな生き物が、私と一緒に階上、階下へとそっと歩く。その大きくて、柔らかくて、重い足は、砂を入れた靴下のように、私の後ろを柔らかい足音を立てながらついてくる。

夕食をテラスでとる。チャールズが食事中ずっと、あの犬、この犬としつけている。母親が絶えずその子供達をたしなめているので、人がイライラして

*52 エドモンド・スペンサー（1552～99）著の長編寓意詩、『妖精の女王』第1巻第3編で、真理を代表する処女ユーナ姫が飢えたライオンを、忠実な家来として手なづける話。

「彼女はいつになったら、子供達に話すのをやめるのかしら？」

と、考えるように、私もそんな心境になった。一緒につながれたスキーとボギーが、もう少しでテーブルをひっくり返すところだったし、ピーターは私の椅子の下で、絶え間なくうなり声をあげ続けていた。パルはといえば、^{ひょう}豹のように辺りをぶらついていた。

7月9日 土曜日

エングルウッドにて

強く激しい風が榎の木に吹く。活動への欲望を、人の精神と魂から完全に洗い落とし、その風は人の中に流れ込み、その必要を完全に満たす。

木々の後ろに花火が上がる。涼しい夜、家からの光が、私達の足元で広がる。パルが静かにして、体を伸ばしているわ。

どこにでも私についてくるこの犬の献身的な愛情には、ワクワクする。新しい恋人が出来たみたいよ。

7月11日 月曜日

エリザベス・ベーコン・ビスグッド⁽¹⁸²⁾が昼食に出かけてきて、夕方までいる。（赤ちゃんの悲劇的な体験をして、）彼女は傷ついているが、勇気を持っている。

ある経験乗り越えたということは、話すことを容易にしてくれる。理解する権利、同情する権利は、努力して得るもの。私達は大いに話をして、理解しあう。

パルが、暗やみの中で私達に飛びつく。

7月12日 火曜日

チェスターおじ様とエイミーおば様がやって来て、水泳をして、ベラ

(182) アン大学の友達で、後に、F・K・ロードウォルド夫人となる。

ンダで夕食をとる。

エイミーおば様は、赤い光沢のある帽子をかぶっている——冷静で物静か。死について話す。

「私は、人は誰も死を知的には恐れないと思うわ。誰も自然の成りゆきがよいことであり、正しいことであるということをわかっているわ。でも、本能的な、肉体的なパニックは……。」

私は、あの子からとてもとても遠く離れているような気がする。振りが揺れて行き着いた、無感覚な時の中で、私はあの子を引き戻そうとはしない。私はただ、必然的な遠さを感じ、それと戦おうとはしない。重苦しく、うっとうしく、無感覚——私はまだ、声に出せない悲しさを感じる。そうではあっても、それは、それ自体がつきものである、あの強く心に働きかけ慰めになるあの子の死を嘆くというものではない。

エイミーおば様は、「それは帰ってくる」と言う。エイミーおば様は、元気づけてくれる。この新しい赤ちゃんが、私とチャーリーとの間を裂くかもしれないと感じて、ある意味では、この子を恐れているこの私に、エイミーおば様が、

「その新しく生まれる家族がチャーリーを連れ戻し、チャーリーがより身近になるのよ」

と、言ってくれたことに慰めを感じる。そして夜、それを裏付けるように、新しい赤ちゃんの夢を見て、その時初めて、私はその子の隣にチャーリーの顔を見たわ。

7月15日 金曜日

エイミーおば様が、生まれてくる赤ちゃんのために薄物の毛布を持ってきた。どうしてかというと、私が同じ様な毛布を、チャーリーのため

に使っていたから。

おば様の〈礼儀正しさに関する教訓〉。

「誰かが一度、兄と私に何羽かの野鴨を送って下さったの。私は野鴨は好きではないけれども、お礼の手紙に『いかにそれがおいしかったか。滅多に肉を食べない兄が、それをとても気に入った……』と書いたの。そうしたら、それ以来毎年、私達は野鴨をいただくようになったわ。私達は、それを人に上げてしまうけれども、鴨は絶え間なくやって来るのよ！」

7月16日 土曜日

まさにスケジュール通りの日。ハーモニー、日光浴、水泳、昼食、練習、犬、昼寝、視奏。視奏は、少し腕が上がったような感じがする。

私は今、人に「さようなら」を言う時、「彼らにはもう会えないだろう」という脅迫観念を持つ。私の中の何かが、絶えずこう言う。

「これを今のうちに捉えなさい。あのジェスチャーを記憶にとどめなさい。これが最後の時……。」

私の中の何かが、すべてのものを意義のあるものにしている。なぜなら、もしかしたら、私がチャーリーと一緒にわずかな時間を十分に大切な意義深いものとせずに、それらの時間を無謀に過ごし、チャーリーが永遠に生きるものとして将来を見ていたからかもしれないと思う。

けれども、人はいつでもだまされるもので、自分が予期している通りのことが、自分には起きないのだ。

チャールズは、私の陰気さや無関心さに対して、とても忍耐強い。

バルが、その鼻を私のベッドの上に乗せて、朝になると、私を起こしに来る。

1932年7月16日の夜 日曜日〔姉宛の手紙〕

エングルウッドにて

大好きな愛するエリザベス、

私達は、サンボーチに座っています。ソファで本を読んでいるチャールズを照らすスタンドと、机に向かっている私の電気スタンドの光が、二人の光輪となっている以外は、完全な暗やみです。犬は皆、私達の足元で疲れて、静かにしていて、ラジオでは、『未完成交響曲』を演奏しています。とても素敵で、穏やかで、爽やかな気分です。

あなたの手紙の中に描かれているイギリスと、ほぼ同じ感じよ。ヴァーノン⁽¹⁸³⁾の訪問の間に書かれたあの2通の手紙を繰り返し読んで、馬車に乗ったり、狩猟場や小さな子羊のことを本当に夢に見ました。あなたの手紙は、とても爽やかで、新鮮だったわ。

ヴァーノンがあの翌日、電話をくれて、彼が出かけて来てくれたので、私達は最高に素敵な楽しい1日を過ごしました。私の大きなお腹と歳にもかかわらず(私は、とても年老ったような気がするのよ)、お喋りしたり、散歩したり、泳いだりして過ごしました。でも私は、ヴァーノンもまた、思いがけず、なんて分別のある人になったのかと、驚きました。彼は、私と同等の立場に立って、接してくれました。素晴らしくて、爽やかで、刺激的な関係でしょ！ 私は、ニールソン夫人の言葉を思い出します。

「結婚していて、一ついいことがあるわ。誰かに対して、あなたがその男性のことをどれだけ思っているかを、伝えることが出来ることよ。」

その間、私は声楽をさぼらずに練習をして(『ねんねんころり』をゆっくりと音符を見ながら歌えるようにね)、テニス・コートとプールを借り

(183) ヴァーノン・モンロー・ジュニア。弟のドゥワイト・モロー・ジュニアの友人。

に来るバトラー家の方々、ジム・マッギルベイン⁽¹⁸⁴⁾達を追い掛けて警察犬のバルが、網戸を突き破って逃げ出さないように気をつけています。警察犬は、彼らが家の角を通り過ぎるのを見ると、一番恐ろしい大きなうなり声をあげます。私は犬の首輪をつかみますが、原則として、犬を軽くたたいて、「いい子、いい子！」と言います。

ヴァイオレットの事件の知らせの前に、オーブリー・モーガン⁽¹⁸⁵⁾があなたに連絡してくれたなんて、彼を抱きしめたいくらいだわ。でも、心配はしないでね。彼に会うようなことがあっても、そのことは言わないから。よくあるようなことよね。あれは、グッド・タイミングだったの。本当に珍しく自分の希望と見事にあったタイミングだったから、人生の中でも最高に輝く瞬間として目立っているの。そして、そのこと自体は大したことでもなくとも、不釣り合いなほど大きなことのように感じるのよ。

あなたがいなくなってから、随分長い日が過ぎました。またあなたに会いたいわ。でも、あなたの手紙を受け取ることと、あなたがそこにいるということを知るのは嬉しいことです。

日記

1932年7月17日 日曜日

1日中、チャールズと私の二人だけ。彼は細菌学を勉強し、私は音楽の勉強——存分に、……やり過ぎでもあるわ！

歩くとき、痙攣が起こる。^{*53}けれども、水泳の時は快適。私は再び若くてスリムになるの。

(184) アンズの従兄弟。

(185) オーブリー・ニール・モーガン。イギリス南西部のウェールズ州の都市カーディフに住んでいた。

*53 妊婦には、よく足がつることがある。

あの子のことでは、私は今、一種の無感覚の状態にある。あの子の部屋に上がって行ったり、あの子のものをしたり、あの子の記録を付けた、写真を見たりということはしない。希望のない無気力状態なのだと思う。あの子は、もういない。どんなことをしても、あの子を取り戻すことは出来ない。あの子は本当に行っちゃったの。出来ることは何もない。こういう切り抜きで、あの子にすがりつこうとすることが、いかに無意味なことか。小さな肖像画にあの子の面影をみようとする、いかに無意味なことか。もしあったとしても、あの子を亡くした現実の、どんな慰めになるというのか。あの子の印象がさらにぼんやりとしてゆき、私は絶望し、必然の運命とは戦うこともない。

もしかすると、この無感覚は、身を守るものなのかもしれない。エミリー・ディッキンソンのあの詩の一節と同じなのかもしれない。

大きな苦痛の後に、現実が訪れる——
神経が墓石のようにおごそかで、動かない。

何も感じなくなった心が問いかける。

苦しみを耐えたのは、

主なるキリストだったのか？

それは、昨日のこと？ それとも幾百年も昔のこと？

.....

これは鉛の時

生き抜いたなら、忘れはしまい。

凍える人が雪を思い出すように

最初は冷たく、それから麻痺が襲い

やがては、黄泉の誘いに身をまかせ

〔上の詩は、『エミリー・ディッキンソン全詩集』にある。〕

7月21日 木曜日

デトロイトのお母さまがいらっしゃる。

7月22日 金曜日

ピーターにパル、それから2匹の黒い犬を散歩に連れて行って、大変な思いをする。ピーターを引っ張ったり、私より先に行くパルを追いかけたり、怒鳴ったり、ドシンドシンと歩いたり、とても暑いし、頭にきたわ。怒鳴るたびに、私の胃が縮んだ。それから、私はチャールズのお母さまと話そうとしたが、考えが散漫になり、頭の中が、まるで硬い紙がバリバリという煩い音でいっぱいになってしまったような感じに。

私達は、世界について話したが、その世界はとても残酷で移り変ってゆく世界で、信頼出来る人や物がまったくない。私は苛立ちと失望を感じたが、それにもかかわらず、私自身の信頼が頑固にも、再び頭をもたげて来るのを意識した。それは、何度も何度も引き抜かれた雑草が、必ずヒョイと生えて来るように……。

チャールズのお母さまが、チャールズが幼い時の写真をいろいろと私に見せて下さったが、

「私にはこんな思い出は残らないんだわ。私の息子、愛しいチャールズが成長して行き、初めて鉄砲を持ったり、泳ぎを覚える時の写真なんて、私は決して見ることはないんだわ」

という感情が、ドツと湧いてくるのがわかった。あたかも、チャールズ以外の息子は、〈私の息子〉ではないかのように……。

義母の見た夢の話——「そして、あなたとチャールズが、あの子の手を引いていたの。『まさか……、これがあのかわいいチャーリーかしら？』と言ったら、あなたが『そうよ』と言ったのよ。」